

ところ変れば 木野 工

日本であるか、外国であるのか、それさえも忘れてしまったのだが、馬が常食に生きたドジョウを食べる地方があると書いてあるのを読んだ記憶がある。生れ育った環境で、慣行となつて行つて他の土地へ行つたらまるで別の扱いを受けることのあるのは、大抵の人が経験している。旅の面白さの一つは、そんな異質の世界に、東の間ながら自分をひたして見ることにある。

『ところ変れば品変る』とは、風俗・習慣についての俗諺なので、ただ、変つたものを見て来たという意味には使わないのだから、敢えて私の『北方圏の旅』見聞の短文に、こんな題をつけたのは、政治的風土、社会政策に対する精神的風土の違いを、日本の政治は悪い、質が低いとなじらずに、皮肉のつもりで旅のエピソードを列挙してみようとしたからである。

四十九年夏、正確に言うと六月二十一日か

ら七月二十五日まで、私はあるTV局の『北方圏』という八本シリーズの番組づくりに参加し、ポーターとして参加し、ソ連を除いて、北極をぐるりと一廻りする旅をして来た。国名で言うと、北緯45度以北の英国、ノールウェー、スエーデン、フィンランド、アイスランド、カナダ、アメリカ(アラスカ)などである。

英国では、別班がアバディーンという石油の町を取材した。北海油田開発で、数年間に貧寒とした漁村が急膨張して金持ちになり、スコットランドの英連邦における経済的、政治的地位を一躍英連邦の主要都市なみに高めたとする所である。活気に満ちている。連邦諸国から労働力を補強しているの、いわゆる英国風の『斜に構えた』気取りなど全くない。一見アメリカ西部の開拓時代を思わせる。ところが、流れこんで来た植民地からの労働者たちは、現実がそれほど甘くないことを知って落伍して行く。行く先はロンドンな

どの大都會。ロンドンで見かける下級労働者はほとんどが、そういう落伍者だから、とにかく柄が悪い。ロンドン空港も例外ではない。出発時に、ロンドン空港では絶対に荷物を預けるな、と注意された。注意はしていたのだが、一行の一人が厄にあつた。バッグをずたずたに切られた。おかしかったのは、中味が味噌汁やラーメンのインスタント食品ばかりで、危険を犯してやった方もがっかりだったろうと思われることだった。しかし、北海の石油景気が英国に活気を吹きこみ、ピートルズを生み出し、ミニスカートを世界の流行に乗せた雰囲気だけはわかるような気がした。英国を紳士の国だときめてかかつて出かけて行くときまるで勝手に違ふ。

オスローでは夏至のお祭りを取材した。北方圏に住む人々にとって、太陽は夏を意味し生物の成長そのものを意味する。白夜という全く奇妙な現象(本当は奇妙でも不思議でもない、当然の物理的な現象なのだが)は北緯65・5度、いわゆる北極圏に起るのだが、45度以上になると、夏の太陽を拝める時間が極端に違つて来て、夏の太陽が本当に神様のように感じられる。オスローの夏至は、白夜ではなく夜らしきものが一時間半ほどある。

しかし、その日を境にして明るい時間が、やはり一時間半ほどしかない冬至に向って、太陽が「遠ざかって行く」夏至は、いわばその太陽に別れを惜しむ日でもある。オスロー郊外の、ふだんはまるで人ッ気のない岩山の小公園に、例年オスロー湾岸で一番大きなタイマツが焚かれ、多くの人が夜明けまで歌い踊る「夏至祭」があると聞いて、出かけた。広場らしいものもない岩山が深い海に切り立った崖になって落ちこんでいる小公園には、子供から老人まで、どこから、どうやって集って来たのか不思議なほど、およそ千人位も集まり、海には漁船やヨットやモーターボートも集って来た。廃材を角錐形に組み上げた巨大なタイマツに点火されると、一斉に喚声が挙がる。二次大戦でナチスのUボートが激しい抵抗の末に占領して基地とした複雑な地形のオスロー湾岸には、つぎつぎと百に近いほどの火が闇の中にゆらめき始めた。その灯を遮って、時には古い形の大帆船がゆっくりと港を出て行ったりする。そして、一日毎に日の長くなって来た夏は頂点の夜を境に、一日毎に短くなって行く。その「帰る太陽」の最初の姿を見るまで、人々は岩山にたたずんで帰ろうとしない。主催者なんていない。祭

典委員もいない。寄付もない。タイマツは、近くに住む漁師の自前である。マツリというものは、こういうものだと思つた。オスローに帰つて民族博物館というノールウェーの原初の姿をそのまま遺しているような深い森の中の施設で、観光客のためらしい「夏至祭」を見た。これも、いかにも自然に生れたお祭の良さをよく伝えてはいたが、感動は少なかつた。私は岩山の崖つぶちで、この点々と燃えている火をうたった詩があるのに、どうしても想い出せず、心を焦立たせていた。そして、民族博物館の黒く深い森の中で、竹内てるさんの『迎え火』を、ひょいと想い出した。詩句は全く忘れていたが「……こころ静かに、迎え火を焚く」という句だけを想い出し、ノートにとどめた。

ノールウェーの北端、北緯70度を越えたハノメルフェストという人口一万人ほどの街が白夜の観光地として有名になりつつある。しかし、積極的な宣伝などしていない。ここには医師20人を抱える立派な病院があり、百二十ベッドには完全看護に十分な看護婦さんがいて驚ろかされた。約三カ月太陽が沈まない。逆に言うると約三カ月太陽のない真っ暗闇の冬が続く。しかも、町が出来てから警察に犯罪の記録がなく、警官七人のうち三人が休暇をとっていた。そういう町である。ここに『世界で最も北の看護婦学校』が建つた。そうしたら世界中から看護婦さんが集つて、病院経営の最難問が一挙に解決した。看護婦に關する限り世界で最も贅沢な病院となつた、ということだ。女性の感傷に訴えるのも、また妙を得た政治の一つである。女性はやっぱり優しい。

この丘陵には牧羊民族のラップ人が住んでいる。夏の草原は猛烈な蚊の大群に占領される。牛や羊が蚊に殺されることもある。繁殖期には、ラップのお母さんたちは子供を天幕の外へ出さない。それでも、殺虫剤は一切つかわない。蚊の繁殖を黙って見過す。私などには不思議な慣習に見え、宗教的な意味があるのだろうと思つた。

「虫は自然のサイクルの重要な一環。蚊を殺すと、自然のサイクルが狂う」学問などとは全く縁のないラップのおかみさんが、そう答えてくれた。いい、悪いは別として、これが人間の生活というもの、というしみじみとした実感があつた。